

鳴門教育大学附属中学校
学校関係者評価報告書
(平成23年度)

平成24年3月

学校関係者評価委員会

目 次

学校関係者評価委員会が実施した学校評価について	1
I 学校関係者評価結果	3
II 評価項目ごとの評価	4
1. 楽しい学校	4
2. 美しい学校	5
3. 活力ある学校	6

参考：学校の現況及び目的

学校関係者評価委員会が実施した学校評価について

はじめに

本報告書は、保護者、学校評議員、大学教員、地元の企業経営者で構成された学校関係者評価委員会が、附属中学校の教育活動の観察や校長ほかとの意見交換等を通じて、附属中学校の自己評価の結果について評価することを基本に学校関係者評価を実施し、その結果を報告書として取りまとめたものである。

1 評価の目的

学校評価は、次の3つを目的として実施するものである。

- ① 学校が、自らの教育活動その他の学校運営について、目指すべき目標を設定し、その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について評価することにより、学校として組織的・継続的な改善を図ること。
- ② 学校が、自己評価及び保護者など学校関係者等による評価の実施とその結果の公表・説明により、適切に説明責任を果たすとともに、保護者、地域住民等から理解と参画を得て、学校・家庭・地域の連携協力による学校づくりを進めること。
- ③ 学校の設置者等が、学校評価の結果に応じて、学校に対する支援や条件整備等の改善措置を講ずることにより、一定水準の教育の質を保証し、その向上を図ること。

2 評価のスケジュール

23年7月	第1回学校関係者評価委員会(委員長の選出, 評価項目ごとの評価担当者の決定)
9月	文化祭参観, 校長との意見交換
10月	オープンスクール参観, 校長との意見交換
24年3月	第2回学校関係者評価委員会(評価報告書のまとめ)

3 学校関係者評価委員会委員(平成24年3月現在)

- | | |
|---------|----------------|
| 濱野 正裕 | 前保護者会会長 |
| 手束 直胤 | 前附属中学校学校評議員 |
| ○ 成川 公昭 | 鳴門教育大学大学院教授 |
| 稲木 紀彦 | (株)トクジム代表取締役社長 |

○は委員長

4 本評価報告書の内容

(1) 「Ⅰ 学校関係者評価結果」

「Ⅰ 学校関係者評価結果」では、「Ⅱ 評価項目ごとの評価」において評価項目 1 から 3 のすべての評価項目の内容を総合的に判断し、4 段階評価で記述しています。また、学校の目的に照らして、「主な優れた点」、「主な改善を要する点」を抽出し、上記結果と併せて記述しています。

(2) 「Ⅱ 評価項目ごとの評価」

「Ⅱ 評価項目ごとの評価」では、評価項目 1 から 3 において、当該評価項目が達成されているかどうかの「評価結果」及び、その「評価結果の根拠・理由」を記述しています。加えて、取組が優れていると判断した場合や、改善の必要がある場合には、それらを「優れた点」及び「改善を要する点」として、それぞれの評価項目ごとに記述しています。

(3) 「参考」

「参考」では、自己評価書に掲載されている「Ⅰ 学校の現況及び目的」を転載しています。

5 本評価報告書の公表

本報告者は、鳴門教育大学に提供するとともに、設置者に提出します。また、ウェブページ (<http://www.kinsch.naruto-u.ac.jp>) への掲載により、広く社会に公表します。

I 学校関係者評価結果

鳴門教育大学附属中学校の学校関係者評価は、内容を総合し、4段階評価中の「A 十分達成されている」と判断する。

主な優れた点として、次のことが挙げられる。

- 日本数学会は独自の調査に基づき、最近の学生の論理的文章や、論理を組み立て表現する能力の欠如を指摘している。これに対し本校は、特にサブテーマとして「言語活動の充実と観点別学習評価を生かした指導を通して」を掲げ、「思考力・判断力・表現力を育む授業の創造」にむけて研究を進め、それに基づき授業実践を行っている。現代の子供達に内在する大きな問題を真っ向からとらえ、その解決に向かっており、研究の拠点校としての役割を十分に果たしていると評価できる。
- LF タイムを大学教員だけにとどまらず、OB にも依頼して幅広く行っている。本校には各方面において活躍している先輩方が数多くおり、その方々の話は、ひとごとのものとしてではなく、より身近な人たちの声として心に響くことだと思われる。今後もこのような機会を増やすようお願いする。
- 新教育課程の中で、工夫して総合学習の時間に大学教員と連携した課題探究学習を取り入れている。これは普通の授業とは違った観点からのものの見方や考え方を提供する場となり得る。各単元においても、トピックの新しさだけでなく、多様な考えを駆使して物事の本質に迫ることを実体験する経験を持つことができると高く評価する。
- 東日本大震災の教訓を基に、非常災害時における対応をより現実的なものへと見直している。緊急連絡カード等、学校だけではなく、各家庭にも呼びかけ、連携して緊急事態に対応している。ただ、マニュアルができあがったから O.K. というのではなく、更に引き続き保護者とも連絡を取りあい、繰り返し非常災害の想定を行い、その対応の再確認を定期的に行うことを希望する。
- 学校の資産である天体ドームが眠ったままであったが、今回改修工事も行い、天体望遠鏡の微調整も完了して稼働可能になった。県下の中学校に2つしかなく、学校教育に取り入れることはもちろん、地域への開放も予定されている。「地域のモデル校・拠点校」として、十分に活用してほしい。エレベーターの設置もまた「人に優しい環境」を謳うモデル校として一歩進んだと評価する。
- いじめ問題・不登校生との問題に対し、教員、保護者、専門家が一体となって解決に当たっていることが感じられる。この問題は過去に改善点としてあげられたが、その解消のため、関係者が一体となって不断の努力を続けており、解消に向けてその兆しが見え始めている。短期間で解消するといった性格の問題ではなく、少しずつ地道な対応を継続してゆくしか解決への道はなく、今後とも緩むことなく取り組んでほしい。

主な改善を要する点として、次のことが挙げられる。

- 改善点としてあえて上げるべき点は存在しない。しかしながら、教職員が学校の業務や

研究活動に熱心になればなるほどワークライフバランスの問題は大きく浮かび上げてくる。もちろん教師自身が熱意を持って学校業務や研究活動に当たるのは当然推奨しなければならないことであるが、学校側としてはその思いに乗っかり甘えてしまうことは許されない。教職員ひとり一人が余裕と充実感を持って業務に当たることができる職場づくりが実現できなければならない。お互いの仕事を補佐する体制の確立、大学教員も含んだ教員間の連携、保護者会の協力等、考えられることは十分に実行されている。しかし、それでもなお問題の完全解決には至っておらず、何らかの予算で補助教員の増員が計られることを希望する。

○「学校関係者評価結果」は、次の4通りで判断します（「Ⅱ評価項目ごとの評価」の判断も同じ）。

- A 十分達成されている
- B 達成されている
- C 取り組まれているが、成果が十分でない
- D 取組が不十分である

○上記の他、「学校関係者評価結果」として、評価項目の観点ごとに抽出した「優れた点」、「改善を要する点」を要約し記述します。なお、「優れた点」、「改善を要する点」を要約するに当たっては、当該学校の目的に照らして、重要な位置付けにあると考えられる取組状況を考慮した上で、精選・整理したものを記述します。

II 評価項目ごとの評価

評価項目 1 楽しい学校

【評価結果】 以下の内容を総合し、4段階評価中の「A 十分達成されている」と判断する。

(評価結果の根拠・理由)

観点 1-1 確かな学力の向上：学ぶことのよろこびのある授業への取組ができているか。

研究活動のサブテーマを「言語活動の充実と観点別学習評価を生かした指導を通して」と設定し、本テーマである「思考力・判断力・表現力を育む授業の創造」を目的とした研究活動を行っている。この研究に基づき、学力の定着、学ぶ喜びに繋がる授業の実践が行われている。言語活動それ自身が単に目的ではなく、学力定着のための一つの手段であり、その実現の表れであることを教員ひとり一人が十分に認識し、授業に取り組んでいる。それぞれの教科において活用カード、ワークシート、思考ボード等を活用し、その中に言語活動が効果的に取り込まれて、生徒に訴える授業の構成がなされている。更に、5教科において文部科学省の教育課程研究校としての指定を受け、研究を進めている。これらの研究活動は、単に理論的裏付けにとどまらず、工夫された授業実践に反映され、実際に生徒に学ぶ意欲や物事が分かる喜びを呼び起こしていると、高く評価される。

日本数学会では独自の調査を行い、論理的文章を理解する力、論理を組み立て表現する力が最近の学生から失われつつある、との提言を危機感を持って行っている。そのような状況の中で、本校で行われている試みが数年後に実を結ぶのではないかと期待する。

観点 1-2 確かな学力の向上：一人一人のよさを見つめ自己実現が図られているか。

本校の特徴である LFT（ライブ附中タイム）が計 12 回開催され、附中 OB や大学教員からそれぞれの専門的見地に立った講義が為されている。中学生の時期にこのような話を聞くことは、知的関心の喚起はもちろん、幅広い視野、鋭い感性、豊かな心を持った人格の育成に大きな影響を与えるものと思われる。

新教育課程においても、総合的学習の時間をあて、大学教員とともにチームティーチングで実施している。これも附属学校ならではの特色ある授業である。それぞれの教科において興味を引かれる学習内容が提示されており、生徒それぞれの心に物事に対する考え方の新たな芽を植え付ける企画であると考えられる。授業時間の制約等の問題もあると思われるが、更に引き続きこのような試みが継続されることを希望する。

学校図書室の利用率が低いこと、およびその対策としての図書館運営が課題としてあげられているが、実際の読書に対する評価は図書室の利用度のみで為されるものではない。また、読書量も一つの側面ではあるが、必ずしもそれで測られるものでもなく、その内容が問題である。いかに心

に訴えるものを読むか、読んだものから何を感じ取るかが重要である。この時期に心に響き渡った本がその人の一生を決定づけることも多くある。学校側としては、生徒にそのような機会の提供と指導に心がけるべきであろう。単に読書に限ることではなく、あらゆる場面において生徒の興味や関心を喚起し、生徒自らが意欲を持って物事に取り組む姿勢が身につくよう、細やかな指導を行うことが肝要と思われる。

評価項目 2 美しい学校

【評価結果】 以下の内容を総合し、4段階評価中の「A 十分達成されている」と判断する。

(評価結果の根拠・理由)

観点 2-1 命を大切に：安全安心な学校環境づくりができていますか。

東日本大震災の教訓を基に、非常災害時に対する学校側の対応、生徒のとるべき行動を改めて検討し、対策を講じている。特に生徒に対しては、災害発生時にいる場所に応じてとるべき行動を明記するとともに、緊急時連絡カードを作成し、各保護者と一体になって災害に対する対策を講じている。東日本大震災においてはそれぞれの安否確認も困難になり、また情報の欠如が大きな問題になった。平常時において学校、家庭で十分に話し合い、非常時の対応、行動の確認を行っていることが不可欠であり、とっさに判断し行動できるよう、今後も繰り返し、再確認を続けていくことが求められる。

観点 2-2 心の居場所としての学校・学級づくり：人権教育及び生徒指導への取組ができていますか。

いじめ問題解消、不登校生徒ゼロに向けて学校をあげて不断の努力が為されている様子が見られる。毎年構成員である生徒が入れ替わる状況のなかで、全員に、それぞれの人格を尊重しなければならない、いじめは決して許されることではなく、人として最も恥ずべき行為であるという考えを浸透させ、徹底させるには忍耐強く、あらゆる場面において指導し、生徒自身に考えさせることを続けていくしか方法は無いように思われる。一気に成果を期待するのはむずかしく、そういった中で、保護者の理解を得ながら教職員が一体となってこの問題に取り組んでおり、生徒自身の意識も高くなってきていると判断でき、十分に評価できる。焦ることなく、さらに一層継続して努力されることが望まれる。不登校問題においても、家庭との連携をとりつつ、大学の予防教育センターの専門家の協力も得て解消への努力が為されている。また、基盤となる生徒と教師間の信頼感の形成についても考えた企画が為されており、今後、その成果が期待される。

環境づくりのハード面として、エレベーター設置、天体ドームの改修等が行われ、より良い環境の中での人間づくりに前進している。特に、天体望遠鏡については本校生徒に対してだけでなく、

地域への開放も計画されており、文字通り「地域のモデル校」としての附属中学の役割を確認することができ、高く評価される。

評価項目3 活力ある学校

【評価結果】 以下の内容を総合し、4段階評価中の「A 十分達成されている」と判断する。

(評価結果の根拠・理由)

観点3-1 支え合う教師集団：学校目標共有への取組ができているか。

自己評価表を取り入れ、学校重点目標を共有するとともに、それに向かって各教員が努力を重ねている。それぞれの課題については、自身の努力はもちろん、校長、教師間でも意見を交換しながら解決し、さらには高いものへと引き上げて行っている。お互いに議論し、問題に取り組む場として研究授業や模擬授業の場を設けている。重点目標の実現に向けて主導的に行動する教員が現れ、具体的に目に見える形で、その成果が現れてきているようである。

一方で、更にこの取り組みを充実させるために、教職員のワークライフバランスの調整が重要な課題としてあげられている。しかし、学校における過度の業務を見るとき、絶対的な時間の不足が感じられる。従来よりの提言に基づき、大学教員も含んだ教員間の連携、お互いの仕事を補佐する体制の確立、保護者会の協力等、解決のための工夫は為されてきているが、なかなか根本的な解決には至っていない。厳しい状況の中ではあるが、補助教員の増員によるよりほか根本的解決は難しいように思われる。

観点3-2 研究活動の充実：研究活動拠点校としての取組ができているか。

近年ホームページを通して情報の獲得を行うことが一般的となってきたおり、より充実したものを構成することが強く望まれていた。このことを鑑み、本年度よりホームページをリニューアルし、研究拠点校としての発信を行っている。結果、本校の研究内容に対する問い合わせや、研究視察の希望が増加しており、研究拠点校としての活動の一助となりつつある。このような外部に対する研究活動の発信は、さらなる研究の活性化を促し、あるいは研究情報の交換の場ともなり、より期待される研究拠点校に結びつくものと考えられる。今回のホームページのリニューアルを評価するとともに、今後さらに一層充実したものに発展させるよう期待する。

観点3-3 特色ある学校づくり：伝統の行事と新しい風を意識した取組ができているか。

伝統校において、その伝統の重さとよさを引き継ぎながら、新たな時代に即した取り組みを取り込んでいくことは非常にむずかしい。いつの時代にも不変の一貫した流れがあり、それが何なのか十分に見極めた上で行動しなければならない。年の初めの揮毫式において改めて自らの意思を確認すること、附属中学校の校訓とする言葉を取り上げ、ここで学ぶことの意味を再度確かめること、等、種々の伝統の行事を通して生徒達の心への訴えかけを行っている。そして、新たな風として LF タイムでの講演、校長室ランチ・絵本の読み聞かせを行い、それらを通し伝統行事を通して語られることと同じ普遍なものを訴えている。これら伝統的なものと新しいものとの一連の取り組みは、一体となって、生徒にあるべき姿やその目指すべき方向を伝えており評価できる。

観点 3 - 4 特色ある学校づくり：校内研修充実への取組ができているか。

例年通りの校内研修に加え、特別支援教育に関する研修を導入している。これについては、大学と連携し、研修会・事例研究会を行っている。学校においては各教員に対して様々な知見が要求されるが、それらに対応した校内研修の充実は、即ち、生徒の学校生活の充実に直結するものであり今後も積極的に取り入れていくことが望まれる。

参考：学校の現況及び目的

1 現況

- (1) 学校名 鳴門教育大学附属中学校
- (2) 所在地 徳島市中吉野町1丁目31番地
- (3) 学級等の構成
1学年 4学級 2学年 4学級
3学年 4学級 計12学級
- (4) 生徒数及び教員数(平成23年5月1日)
生徒数 470人 教員数 23人(正規教員)

2 目的

(1) 目的・使命

本校の目的は、附属中学校校則第1条において「小中学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施すとともに、鳴門教育大学(以下「本学」という。)における生徒の教育に関する研究に協力し、かつ、本学の計画に従い学生の教育実習等の実施に当たることを目的とする」と定めており、本校は義務教育を行う任務とともに、教員養成大学の附属中学校として、次のような使命をもった学校である。

- ①大学と一体となって、教育の理論及び実践に関する科学研究を行う研究学校としての使命
- ②地域の教育諸課題の解明、参観者への指導・助言、文部科学省・県教委・地教委等教育関係機関からの要請による教員派遣など、教育界の発展に寄与する使命
- ③鳴門教育大学の学部学生及び大学院生の教育実習等を行う使命

(2) 教育目標

本校は、校則第1条に示されている中学校教育の目的の達成のため、次のような教育目標を掲げ、めざす生徒像・教師像・学校像を明確に示している。

○知・徳・体の調和的人格の完成をめざし、自主・自立の精神、創造的能力、豊かな人間性をそなえ、国際社会の発展に寄与することのできる心身ともにすこやかな中学生を育成する。

めざす生徒像

- 目標を持ち、自主的、創造的に学ぶ生徒
- 強靱な意志と体を持ち、たくましく生き抜く生徒
- 優しく思いやりの心を持ち、人につくす生徒

めざす教師像

- 生徒を愛し、生徒とともに伸びる教師
- 強い使命感、鋭い教育観をもった教師
- 優れた指導力をもった教師

めざす学校像

- 創造的な知性を磨く学問学校
- 情熱的な意志を鍛える鍛錬学校
- 強健な身体を練る体育学校
- 敬和奉仕の精神に生きる人間学校

(3) 平成23年度重点目標

鳴門教育大学との連携を密にし、中期目標・中期計画・本年度計画の実現に努めながら、次の3本柱5項目から教育目標の具現化を図る。

- ①楽しい学校
- ②美しい学校
- ③活力ある学校

(4) 評価項目

- ①楽しい学校
(確かな学力の向上)
 - 「学ぶことのよろこびのある」学校に
 - ・LFT(ライブ附中タイム)の取組の状況
 - 講師陣の開発と充実
 - 一人一人のよさを認め、自己実現を図る
- ②美しい学校
(命を大切に)
 - 安全・安心な学校環境づくり)
 - ・防災マニュアルの整備
 - ・エレベータの導入
 - (心の居場所としての学校・学級づくり)
 - 人権教育及び生徒指導の取組の状況
- ③活力ある学校
(支え合う教師集団)
(研究活動の充実)
 - 研究活動拠点校としての取組の状況
 - ・各教科における言語活動の充実(3年次)
 - ・新学習指導要領への移行措置の確実な実施
 - ・研究活動の発信
 - (特色ある学校づくり)
 - 伝統と新しい風
 - 校内研修の充実